清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

1

母を連れ大旅行

親孝行、豊かな人間味

庄内町清川出身の幕末の志士、清河八郎は1855（安政2）年、母を連れて約半年間にわたり全国を旅行し、旅日記「西遊草」にその記録を収めた。地方のまちづくりを支援する東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）は、八郎親子が旅した県内ルートを「西遊草の道」と名付け、日記に沿って検証することにした。2回に分けて行う計画で、まず前半部分の踏査に同行した。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

清河八郎が母の亀代と下男の貞吉を伴って伊勢参りの旅をしたのは、数え年で八郎26歳、亀代41歳の時。新潟や長野の善光寺を経由して伊勢神宮（三重県）を参拝し、金刀比羅宮（香川県）、厳島神社（広島県）、錦帯橋（山口県）まで足を延ばした。

帰路は東海道を下って江戸に1カ月ほど滞在。日光（栃木県）、福島、米沢、山形、尾花沢と北上し、清川へ戻った。今の暦で言えば5～10月の5カ月半に及ぶ長旅だった。

「西遊草」は、この旅の道中日記。八郎は毎日宿に着くと、その日見聞きしたことなどを筆まめに書きつづった。母に老後に読んで楽しんでもらうことが目的で、弟や妹が後日伊勢参りをする際、ガイドブックとして参考にできるようにもしたという。

戦がなくなり街道も発達した江戸時代は庶民の旅行ブームが起こり、信仰を名目にした物見遊山の旅が広まった。旅日記も多数残っているが、母を連れて大旅行をした記録は珍しい。

尊王攘夷の志士、策士といった八郎のイメージとは異なる、親孝行で人間味豊かな一面が伝わってくる。行く先々の名所や旅籠（はたご）の印象、女性に厳しかったという関所での出来事、茶屋の老人らから聞いた言い伝えなどが詳しく記され、優れた紀行文として作家、研究者の著書、郷土史資料などに引用されることも多い。

作家の田辺聖子さんは、江戸時代に伊勢参りをした筑前（福岡県）の商家の女性の旅日記を基にした「姥ざかり花の旅笠」で、たびたび「西遊草」に触れ、八郎の人物像を「天性、人なつこさがあったのか、旅中も袖振り合うた旅行者たちに慕われている」と書いた。

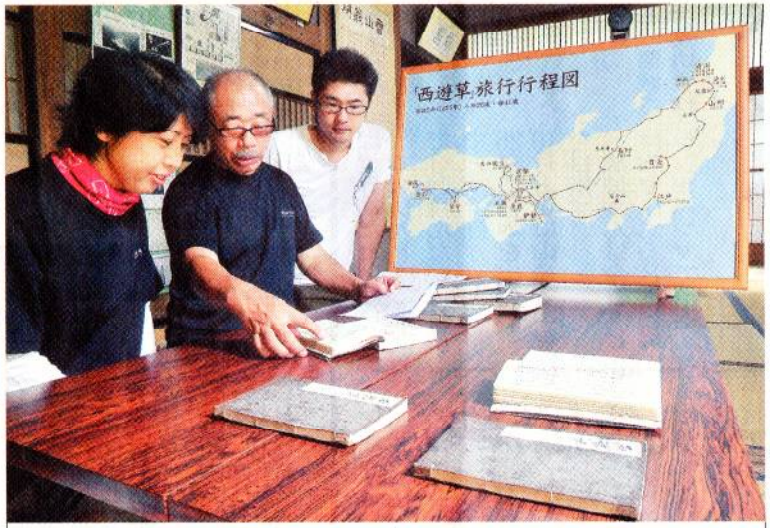
「西遊草」は1969（昭和44）年に小山松勝一郎さん（故人）の編訳による現代語訳（平凡社・東洋文庫）が、93年には小山松さん校注の原文全文（岩波文庫）が出版された。小山松さんは現代語訳の解説で「（この書で八郎の）国事奔走の根底となっている性格や思想を理解することができる」とし、豪放な半面、気にかけていた母との旅行を実現し、克明に記録したこまやかな愛情に人間性が表れていると指摘した。

「元気・まちネット」は八郎が学者を志して家出し、江戸へ向かった県内ルートを「回天の道」と名付けて2009～10年に踏査した。今回計画した「西遊草の道」の踏査前半は、清川から鶴岡市の中心部、湯田川、田川、小国などを経て新潟県境を越える地点までをたどる。

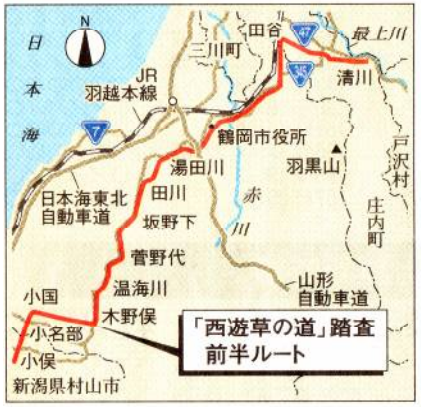
初日の踏査メンバーは矢口代表ら3人。最初に清川の清河八郎記念館を訪れ、西遊草の原本（県指定文化財）を見せてもらった。全11巻8冊で、いずれも縦19センチ、横13センチ。草書体でよどみなく書き進めている。他に八郎が旅先で詠んだ漢詩集「奉母行」などもある。

同館は八郎たちが歩いた長い道のりを示す全国地図を展示している。「157年前に、これほどスケールの大きな旅を敢行した八郎と亀代のパワーには脱帽する。どんな道を歩いたのか知りたい」と矢口さん。

隊員らは同館近くの八郎の生家跡に移動し、地元の人に見送られて出発。清川の集落を抜けて北楯大堰沿いの古い街道に出た。



清河八郎記念館で「西遊草」の原本を見せてもらう「元気・まちネット」の踏査隊　＝庄内町清川



清河八郎　1830（天保元）年、清川村（庄内町清川）の裕福な造り酒屋の長男として生まれた。47（弘化4）年に家出して江戸に上り、儒学と剣の修業を積んで塾を開いた。その後、尊王攘夷（じょういう）の急進派と「虎尾の会」を結成。奉行所の手先とみられる町人風の男を斬って追われる身となり、潜伏しながら諸国の志士を結び付けたが、寺田屋事件で挫折した。63（文久3）年には幕府に働き掛けて浪士組を組織。同年暗殺された。浪士組は新徴組、新選組となり明治維新を迎えた。

山形新聞
2012年8月25日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

2

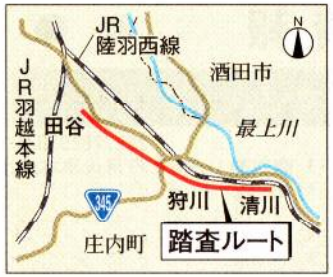
田んぼ道3時間

昔人の健脚ぶり実感

清河八郎の旅日記「西遊草」によると、八郎が母の亀代を伊勢参りに連れて行くため生家のあった庄内町清川を旅立ったのは1855（安政2）年の旧暦3月20日。新暦では5月6日に当たる。亀代は実家のある鶴岡へ前日出発した。

八郎は清川の酒造家斎藤家の長男。広大な田畑、山林を所有する裕福な家だったが、数え年18歳の時に家出して江戸で学問と剣の修業に励み、同25歳で神田二河町に塾を開いた。

ところが、この塾は火災に遭ってあっけなく焼けてしまい、今後の身の振り方を相談するため帰郷した。そこで父豪寿（ひでとし）と相談し、長い間心配をかけた母を伴って伊勢参りの旅に出ることを思い立ったらしい。



清川を出た八郎は、庄内町田谷に向かった。「西遊草」に「田谷村をすぎ、渡部氏の家に休み、一杯の酒を傾ける」とある。ちょうど渡部家の主人が斎藤家に滞在しており、八郎の旅立ちに同行して帰宅した。

清川から鶴岡に出るルートは、通常なら庄内町東興屋、狩川、千本杉、鶴岡市藤島などを経由する清川街道（江戸街道）を通っていたが、渡部家に立ち寄るため遠回りになる田谷への道を進んだようだ。

東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は、八郎がたどったのに近い道を確認するため、清川から集落伝いに歩いて田谷を目指した。

狩川から先は田んぼの中の道を進み、廻館を経て田谷へ。日差しが強く、汗だくになりながら約14キロを3時間かけて歩いた。踏査に加わった鶴岡市湯田川、旅館業庄司庸平さん(33)は「昔の人の健脚ぶりをあらためて実感した」。

八郎に同行した「渡部家の主人」とはどんな人物だったのか。岩波文庫版「西遊草」の校注には、渡部作左衛門という田谷村の富農で斎藤家の親類とある。

田谷に着いた踏査隊が農業若松功雄さん(73)方を訪ねると、1771（明和8）年に作左衛門家が松山街道に架けた石橋の石が残っていた。若松さん方は渡部家のうまやがあった場所だという。「今は畑などになっているが、うちの周りは昔は広い渡部家の屋敷だった」と若松さん。

渡部家は代々作左衛門を襲名していた。地元の歴史に詳しい田谷の渡部哲夫さん(88)によると、初代作左衛門は藩主酒井氏が庄内へ入部したころ大阪から田谷に移り、子孫が地主として勢力を拡大していった。1813（文化10）年ごろには羽黒山に1万本の杉苗を奉納し、「田谷杉」と呼ばれる美林に育った。

「西遊草」で八郎が渡部家を訪れた翌1856（安政3）年、渡部家は庄内地方の長者番付「鶴亀松宝来見立」で小結に昇進した。哲夫さんは「作左衛門は手広く商売をして斎藤家とも交流があり、江戸への行き来などで清川に立ち寄ることが多かったのだろう」と話す。

その後、明治に入ると酒田新井田倉庫の払い下げを受け、倉庫業で巨万の富を得た。明治天皇行幸の際は行在所（あんざいしょ）の指定を受けたが、国のデフレ政策や膨大な出費などで没落したという。

「西遊草」には、八郎が田谷から鶴岡に向かった道は書かれていない。「江戸時代に田谷から鶴岡へ行くには松山街道で八色木を通り、藤島で清川街道に出た。清河八郎もそこを通ったに違いない」と哲夫さんに教えてもらい、そのルートを進むことにした。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

明和年間に渡部作左衛門家が架けた橋に使ったという石を確認する踏査隊＝庄内町田谷

山形新聞
2012年8月26日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

3

江戸期、別の道中記

浮かぶ 周辺の人間像

庄内町清川出身の幕末の志士・清河八郎が1855（安政2）年、母を連れて全国を旅した際の日記「西遊草」の県内ルートを探る東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は、同町田谷を出て鶴岡へ向かった。

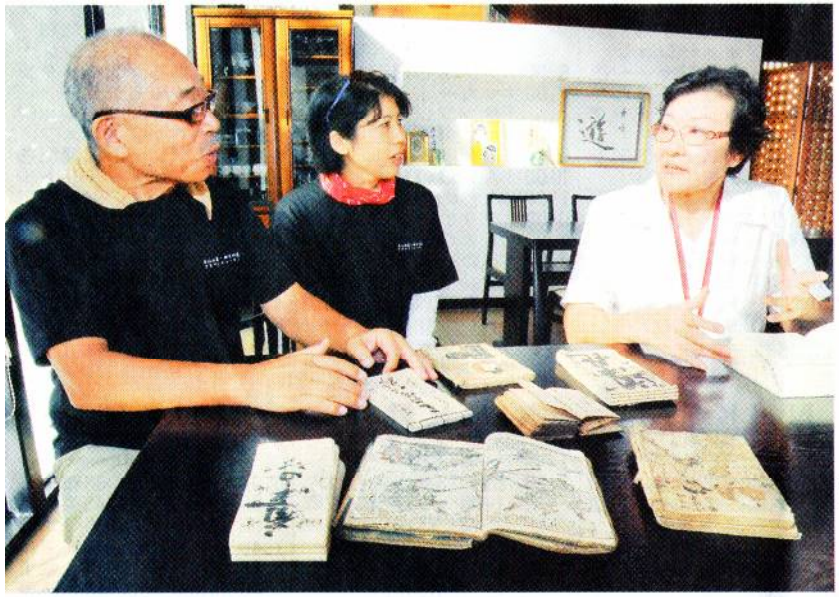
昔の松山街道に近いルートをたどり、田谷から同町西袋、鶴岡市八色木を通過。同市藤島で清川街道との分岐点を示す「松山街道追分石」を見つけた。古い石に「向鶴岡　左松山　右清川」と刻まれているのを確認し、ここから清川街道の踏査を試みた。

江戸時代に清川街道は江戸街道とも呼ばれ、鶴岡から江戸へ行く最も主要な道路だった。庄内藩主が参勤交代で江戸に上るには、鶴岡から清川までは陸路で、清川からは船で最上川を上り、大蔵村清水で上陸して再び陸路を進んだ。

追分石から数百㍍南下した辺りに、かつては藤島御茶屋があった。本陣とも呼ばれ、藩主が参勤交代や鷹（たか）狩りをした際に休憩、宿泊に使った。1872（明治5）年、松ケ岡開墾場に集会所兼事務所として移築され、今は跡形もない。このあと隊員らは渡前、大半田などを経由して鶴岡市中心部に入った。

清河八郎の母亀代は、どんな人だったのだろうか。岩波文庫版「西遊草」には、鶴岡荒町の富商二井弥吉の二女とある。実家は長女の政代が婿を取って家督を継いでいた。亀代が八郎と伊勢参りの旅をした際には、政代を伴って出発した。

八郎の生涯を描いた藤沢周平の小説「回天の門」には、八郎が遊女だったお蓮を妻にする際、反対していた両親を政代が説得したことが描かれている。政代の夫弥兵衛は、学者になろうと家出した江戸で所持金を使い果たしてしまった八郎を助け、その後一緒に京都、大阪、岩国などを旅行した。そのルートは「西遊草」の旅路と重なる部分が多い。


三井清野の道中記を見せてもらう踏査メンバー＝鶴岡市

踏査隊は鶴岡市本町1丁目、医療法人理事二井圭子さん(69)方を訪ねた。ここでは数年前、江戸時代の女性が残した貴重な道中記が見つかった。先祖に当たる二井清野という人で、八郎親子の伊勢参りより38年前の1817（文化14）年に日光、江戸、伊勢、京都、新潟などを旅行した。

作家の金森敦子さんが「きよのさんと歩く大江戸道中記」として出版。その内容から、清野が江戸の庄内藩邸を見学させてもらったり、遊郭見物や大量の買い物を楽しむなど豪華な旅をしていたことが分かる。

清野の家は、二井弥惣右衛門の屋号で栄えた豪商。清河八郎の清川の生家斎藤家と縁が深く、清野の母は斎藤家から弥惣右衛門家に嫁いだ。それだけでなく八郎の母亀代と伯母の政代は清野の妹の娘で、弥惣右衛門家は亀代の実家の本家に当たる。

踏査隊は清野の道中記の原本を見せてもらった。圭子さんは「初代弥惣右衛門はもともと伊勢商人だった。別の道中記もあり、清野の娘も長旅をしたらしい」と話す。

「実際に歩いてみると、西遊草には書かれていない八郎周辺の人物像が浮かび上がってくる。収穫は大きい」と矢口さん。踏査隊は鶴岡市の中心街を離れ、湯田川温泉を目指した。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

山形新聞
2012年8月27日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

4

難所続く峠道

山腹の洞窟に「千体仏」

安政2年3月21日（1855年5月7日）、清河八郎は母亀代と伯母の政代、下男の貞吉を連れて鶴岡城下を出発した。

八郎の旅日記「西遊草」（東洋文庫）には「湯田川の温泉旅館鞦負（ゆぎえ）の2階でしばらく休み、あらためて酒宴を開き」「温泉旅館隼人の家人たちも鞦負の家人たちとともに見送りに出て」とある。

「鞦負」は昨年まで営業していた鶴岡市湯田川温泉の大国屋旅館。元女将の佐藤祝子さん(73)は「ここには清河八郎の書簡や色紙が残っている」と話す。「隼人」は現存する旅館で、戊辰戦争の際には新徴組が本部を置いた。

「西遊草」の県内ルートを検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は、湯田川温泉から小国街道の道筋を探り、徒歩で進んだ。

小国街道は鶴岡市街から湯田川、田川、木野俣、小国などを経て堀切峠を越え、新潟側に入る旧街道。390年前の1622（元和8）年に酒井氏が庄内に入部した際は、この道を通った。古くは本街道の役目を果たしたが、峠が多く道幅も狭かったため江戸中期以降は浜街道の脇街道のようになったという。庶民の道として伊勢参りや善光寺参り、他藩からの出羽三山詣などに利用された。

隊員らは湯田川の温泉街を抜け、大日坂峠の舗装された坂道を上った。頂上付近で細い道に入ると、大日堂跡の石碑がある。峠を下り田川の集落へ。集会所になっている田川村役場跡の近くに「岩谷千体仏」の説明板を見つけた。

「西遊草」には「町田川宿を過ぎ、石体の千仏が安置してある岩屋に立ち寄り、間もなく鬼坂峠を越える」と書かれている。

説明板から少し入った山腹の小高い場所に洞窟があり、小さな観音像が多数並んでいた。難所が続く街道での安全を祈ったものだという。洞窟までの岩を掘り出したような階段は滑りやすかったが、隊員らは「隠れたパワースポットに出合った」と満足そう。

このあと坂野下から旧鬼坂トンネルに向かう道を上り、途中から枝道に入って鬼坂峠を目指した。カーブを登り切ると馬の背のような尾根道に出て、近隣の山々のほか眼下に坂野下の集落、右手には国道345号の高架橋が見えた。

やがて杉林の中の細い山道に入った。峠に着くと、鳥居の奥に鬼坂地蔵堂跡の碑が立っていた。泣きだしそうな曇り空の下、峠を下るが、草が膝上まで繁茂して歩きにくい。倒木の下をくぐり、崩落したがれきを乗り越え、ようやく麓の民家にたどり着いた。

「鬼坂峠は道を整備すると楽しいトレッキングコースになりそうだ」と踏査メンバーの高橋茂さん(62)＝戸沢村津谷。

鬼坂地蔵堂は1970（昭和45）年、坂野下の瀧泉寺に移された。寺には今でも庄内各地から地蔵のお参りに来るという。伊藤宗弘住職(64)は「峠を普通った親に連れてこられ、今も参拝を続けているお年寄りもいる」と話す。

清河八郎は「西遊草」に鬼坂峠の風景を「峠の頂に茶店がある。多くの村里を一望に見おろし、この辺では最も景色のよい所である」と書いた。鬼坂峠からの眺望を描いた昔の絵を見ると、遠く鳥海山まで見渡せたようだ。現在は樹木が高く伸びて頂上からの展望は開けていない。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

鬼坂峠に向かう道から坂野下の集落や国道345号の高架橋が見えた　＝鶴岡市

山形新聞
2012年8月28日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

5

清河八郎の旅日記「西遊草」の県内ルートを探る東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は鬼坂峠を下り、鶴岡市菅野代に着いた。

「西遊草」（東洋文庫）には「菅野代の村役人榎本万太郎の家に泊まる」とあり、八郎が庭の池に群がっているコイに餌を与えて楽しんだことや、とろろ芋がおいしかったこと、周辺がシイタケの産地だったことなどが書かれている。

「村役人榎本万太郎」の子孫の家は菅野代に残っていた。今は空き家だが、市内に住む所有者が時折足を運んでいる。その家族に聞くと、もともと敷地の広い家で、出羽

整然と並ぶ家々

今も残る宿場の面影

二山に参拝に来た講の人などが泊まったという。清河八郎がコイに餌をやった池は、数年前の水害で土砂に埋まってしまった。

この後、隊員らは温海川、木野俣を経て同市小国に向かった。八郎は温海川の印象を「四方に青々と山や谷を巡らし、山間の眺めのよい村である」と書いた。八郎親子は木野俣を通り過ぎた辺りで小国の関所役人畑田安吉の出迎えを受け、安吉の家で昼食を取った。

小国は江戸時代、庄内五関の一つとして庄内藩が番所を置いた。1702（元禄15）年の「小国村絵図」を見ると、村の南端に小国口番所があり、街道の両側に同じ大きさの61軒の家が整然と並んでいる。

小国の家並みには今でも宿場の面影が色濃く残る。踏査隊は、旧街道沿いに立つ関所跡の標柱を確認。自治会長の五十嵐俊司さん(61)によると「庄内藩が計画的に区割りをして宿場をつくった。関所には藩士が常勤し、だんな屋敷と呼ばれる家に住んでいた」。

「西遊草」で八郎たちを迎えにくる「安吉」は、八郎の少年時代の恩師畑田安右衛門の長男。五十嵐さんから番所に勤めた藩士の記録を見せてもらったが、安吉の名前を見つけることはできなかった。

「昭和30年代までは、かやぶき屋根の宿場で知られる大内宿（福島県）と同じ景色がここで見られた」と五十嵐さん。街道沿いの各家の間口の広さは、ほぼ昔のままだという。

家並みに宿場の面影が残る鶴岡市小国の旧街道を歩く踏査メンバー

踏査隊は小国から歩いて角間台峠へ。道は廃道になっていたが昭和50年代に改良工事が行われたという。峠の先は小名部。藩政時代はここにも番所があり、小国と一重で人や荷物を検問していた。

そこからさらに新潟県境の堀切峠へと歩く。峠道はアブが多く、マムシもはい出て隊員らを驚かせた。堀切峠に達すると「庄内藩主酒井忠勝公が信州より入封のとき、堀切峠を越え小鍋（小名部）村にて昼食をとった」などと書かれた説明板が立っていた。

新潟県側に峠を下ると村上市小俣に到着。八郎は「小俣村まで努力してたどり着き、佐藤吉左衛門という家に泊まる」と「西遊草」に書いた。小俣もまた宿場の雰囲気が残る地域で、家々に屋号を書いた看板を掲げている。

踏査隊は八郎親子が泊まった「佐藤吉左衛門」の屋号を継いでいる家を見つけた。小俣の歴史に詳しい地元の佐藤伊勢男さん(87)は「吉左衛門は江戸時代に旅籠（はたご）をしていた。清河八郎と母が1泊した」と語った。

「西遊草の道」の踏査前半はここが終点。参加した「元気・まちネット」の佐野千晶理事は「それぞれの集落の家並みが美しく、八郎の視点から見た風景を確認できて楽しかった」と笑顔を見せた。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

＝おわり

山形新聞
2012年8月29日
に掲載！